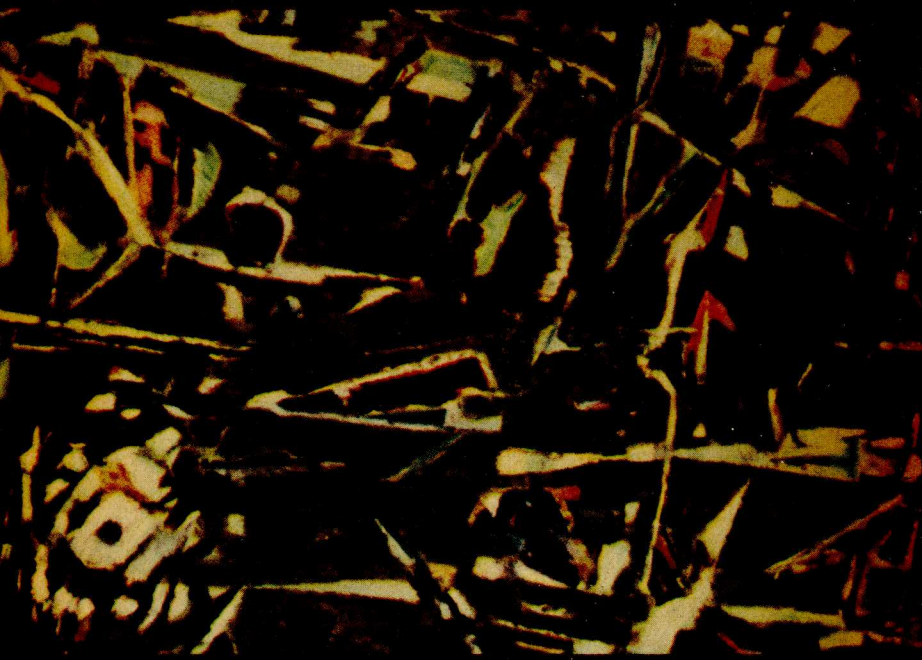


ROGER MARTIN DU GARD



LES THIBAUT 3

SHINCHOSHA

チボー家の人々

3

マルタン・デュ・ガール
山内義雄 譯

新版世界文學全集

31

新潮社 版

新版世界文学全集 31

チボー家の人々 3

Title: LES THIBAUT

Author: ROGER MARTIN DU GARD

Original copyright by Librairie Gallimard, Paris.

Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokyo.

This book is published by the arrangement
with Librairie Gallimard and Hakusuisha through
Bureau des Copyrights Français.

昭和三十五年四月一日 印刷
昭和三十五年四月五日 発行

定価 参百五拾円

訳者 山内義雄

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐藤義夫

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社新潮社
電話東京(341)七二一九番
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。 印刷 二光印刷株式会社
製本 荒木製本所

© Printed in Japan

目次

父の死 (2)

六 終焉	二
七 遺骸	三
八 死の翌日。弔問。エツケ博士、ロベール少年、シャルル氏、アンヌ・ドウ・バタンク	三
九 かつての日のジゼールの部屋で	三
十 チボー氏の遺書など	四
十一 ジゼール、ジャックの部屋を訪れる	六
十二 葬儀	七
十三 ジャック、クルーイを訪れる	八
十四 埋葬からの帰り、アントワーヌとヴェカール神父との対話。絶対隔離	九

一九一四年夏 (1)

一	一九一四年六月二十八日・日曜日——ジュ ネーヴにて。ジャック、パターソンのアト リエでモデルとなる……………	二三
二	六月二十八日・日曜日——グロープ・ホテ ルでのジャックとヴァンネード……………	二七
三	六月二十八日・日曜日——ジャックのメネ ストレル訪問……………	三三
四	ジャックの属する国際革命家集団……………	四〇
五	六月二十八日・日曜日——本部での集会……………	四七
六	(つづき)……………	五八
七	(つづき)……………	六六
八	六月二十八日・日曜日——ジャック、メネ ストレルおよびミトエルクと散歩する——暴力 論議……………	七七
九	(つづき)——サラエヴォにおける暗殺事件 の報……………	八九

十	七月十二日・日曜日——メネストレルのも とでの集まり。ベームと最近ウィーンから 帰来したジャックとによるヨーロッパ情勢 に関する説明	一九四
十一	(つづき)	二〇六
十二	七月十二日・日曜日——戦争の脅威にた いするメネストレルおよびアルフレダ間の反 発	二二四
十三	七月十九日・日曜日——アンヌ・ドウ・ バタンクールの午後	二三五
十四	七月十九日・日曜日——ジャック、兄を 訪問す。アントワヌ、その新居を弟に見 せること	二三五
十五	七月十九日・日曜日——兄弟対外政策に 関して語り合う	二三七
十六	七月十九日・日曜日——ジャック、兄の 家にて晚餐を共にす。家庭的な話	二三八
十七	七月十九日・日曜日——社会問題にたい	

するジャックとアントワヌとの態度の相

違——思いもかけぬジェンニー・ドウ・フ

オンタナンの来訪………

十八 七月十九日・日曜日——アントワヌと

ジャックと、ジェンニーのあとから、ジェ

ローム・ドウ・フォンタナンがピストル自

殺を企てたホテルに出かけること………

十九 七月十九日・日曜日——ジャックにとつ

ての一日の終り——新しい政局………

二十 七月十九日・日曜日——アントワヌ、

フォンタナン夫人とともに病院に宿泊………

二十一 七月十九日・日曜日——ジェロームの

枕もとでのフォンタナン夫人………

二十二 七月十九日・日曜日——弟の来訪につ

いてのアントワヌの反省………

二十三 七月十九日・日曜日——アントワヌ、

フォンタナン夫人の依頼によりグレゴリー

牧師の来訪を求む………

二十四 七月二十日・月曜日——パリにおける

ジャックの一日——ジュネーヴへ出発に先

だち、病院にダニエルを訪ねること……………三二〇

二十五 一九一四年七月二十日・月曜日——ア

ントワヌとアンヌ、パリ郊外へ晩餐に赴

く……………三二四

二十六 七月二十一日・火曜日——ジャック、

ジュネーヴに帰る……………三二九

二十七 七月二十二日・水曜日——ジャック、

任務をもってアントワープに行く……………三五四

二十八 七月二十三日・木曜日、二十四日・金

曜日——ジャック、パリに帰り、しばらく

滞在のこと……………三五八

二十九 七月二十四日・金曜日——夫の棺前に

あつてのフォンタナン夫人の黙想……………三六五

三十 七月二十四日・金曜日——天文台通りの

家に独り帰ったジェンニーの午後……………三七三

三十一 七月二十四日・金曜日——ジャック、

ダニエルを訪れ、ともにそのアトリエに赴
く……………三七七

三十二 七月二十四日・金曜日——夕刻、ジャ
ック『ユマニテ』社に赴く。悲観的形勢……………三六九

チ
ボ
ー
家
の
人
々

3

Title : LES THIBAUT
Author : ROGER MARTIN DU GARD

Original copyright by Librairie Gallimard, Paris.
Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokyo.
This book is published by the arrangement
with Librairie Gallimard and Hakusuisha through
Bureau des Copyrights Français.

本書は仏蘭西著作権事務所を通じて、原著作権所有者ガリマール書店と
日本語著作権所有者白水社の諒解のもとに刊行する。

父

の

死

(2)

六

呼吸困難の発作は、入浴によつて当然あたらえられるはずの休息をチボー氏からうばいとつてしまつた。けいれんの発作は、あとからあとから襲つてきた。ちよつとうとうとする間に、新しい力がたくわえられたにしても、それはあとからさらに大きく苦しむためとでもいうようだった。

第一と第二の発作のあいだには、小半どき以上もの時が過ぎた。だが、内臓の苦痛と神経痛とは、ふたたびその苛烈さを回復したらしく、こうしたあいだも、病人は縦横に身を伸ばし、うめき声をたてていた。三回目の発作は第二回めのあと十五分ばかりしてやつてきた。やがて発作は、強弱の差こそあれ、わずか何分という間隔で襲つてきた。

朝、やつてきたあと、午後のあいだ何回となく電話をかけてきたドクトル・テリヴィエは、晩の九時ちよつと前にふたたびやつてきた。病室に足を踏み入れたときは、ちよつとチボー氏がえらい勢いであばれまわっているときだった。チボー氏をおさえている人たちの力のひるん

だのを見た彼は、自分も急いで手をかした。脚をつかまえようとしたが、たちまちするりとぬけてしまつた。そして、彼ははげしく蹴あげられ、危うく床にたおれかけた。老人に、まだこれほどな力が残つていようとは、とても考えられないことだった。

こうした興奮がすむやいなや、アントワヌは、テリヴィエを部屋に向こうへ連れていった。彼はなんとか言いたかつた。事実なんとか言ひさえた。(だがそれは、部屋中を満たしているわめき声のため、テリヴィエの耳には聞こえなかつた)そして、唇をふるわせながら、たちまち口をつぐんでしまつた。

アントワヌは、つとめて氣を落ちつけようとした。そして、テリヴィエの耳に身をかしげると、どもりどもり言つた。

「ねえ……あの……あの……たしかに、もうとてもだめだぜ……」

彼は、テリヴィエを、親しみをこめた懇願の氣持で見まもつていた。それはテリヴィエから、救いを期待しているともいうようだった。

テリヴィエは目を伏せた。

「落ちつくんだ」と、テリヴィエが言つた。「落ちつくんだ……」それから、ちよつと黙つていたあとで「よく考へて見たまえ……脈は弱い。三十分前から尿通がない。尿毒症は昂進している。発作は明らかに間歇的だ……君

のへばっていることはよくわかる。だが、もう一息のしんほうだ。ご臨終も遠くはあるまい」

アントワーンは、肩をまるめ、その目はほんやりベッドのほうをながめて、なんとも返事をしなかった。顔は、まったく表情を変えてしまっていた。彼は、まるで麻痺してでもいるようだった。▲ご臨終も遠くはあるまい……▼おそらくそれに相違なからう？

アドリエンヌと年寄りの童貞さんをしたがえてジャックがはいって来た、交替の時間だった。

テリヴィエは、ジャックのほうへ歩みよった。

「今夜は泊まりましょう。兄さんをすこし休ませてあげたいから」

アントワーンは、この言葉を聞いた。やっとこの部屋を出て、静かにしていられるだろうという誘惑——横になることができ、おそらくは眠ることができ、すべてを忘れられるだろうという誘惑、それはいかにも熾烈をきわめていて、その結果、彼はちよつとのあいだ、テリヴィエの申し出を受け入れようとさえ考えた。だが、ほとんどすぐに思いなおした。

「いや」彼は、きわめてしつかりしたちようしで言った。「それはありがたいがご辞退しよう」彼には、それが、なぜとは説明できなかったが、承諾していけないことだけは深く心に感じられた。自分自身の責任とにらみあっていること。自分の運命と対しあっていること。そ

して相手が手をあげかけたのを見ると「もうこれ以上言わずに」と言った。「決心はできてる。今夜はまだ人かずも多いし、それにみんなだいたい元氣だ。君は、あとのための取っつきになってもらおう」

テリヴィエは肩をすくめてみせた。だが、この状態は、これからさき幾日かつづくらしく思われたし、それに、いつもアントワーンにたいして我を張らない習慣だった彼としては、けつきよくこう言わずにはいられなかった。

「よからう。だがあしたの晩は、君がなんと言ったって……」

アントワーンは身動きもしなかった。あしたの晩？

あしたもこうしたいけれど、こうしたわめき声を聞くことになるのか？ もちろんそうありそうなことだった。ことによれば……あさっても。それもありうることだった……彼の眼差は、弟のそれと行きあった。ジャックだけにはこの懊惱が察してもらえ、そして、いっしょに苦しんでもらえるのだ。

だが、ふたたびおこったわめき声は、新たな発作のおこったのを告げた。おのおの部署につかなければならなかった。アントワーンは、テリヴィエの前へ手を出した。テリヴィエは、ちよつとのあいだその手を自分の両手で握りながら、▲元氣を出せよ▼と、言おうとした。だが、彼にはそれが言えなかった。そしてなにも言わず

に帰っていった。アントワヌは、彼の立ち去るのをながめていた。自分もまた、今まで幾度か、重病人の枕もとを離れるにあたり——その夫なる人の手を握り、微笑をつくり、母なる人の眼差を避けたあと——背中をくると向けるやいなや、こうしたほっとした気持を味わわされた！ 今テリヴィエの帰る姿が、いかにもほっとしたようにみえたのも、まさにそうした気持からにはかならなかった。

十時、それまでたえまなしにつづいていた発作は、どうやら極点に達したように思われた。

アントワヌは、まわりにいる人たちのあいだに、勇気がたまるみ、忍耐力がゆるみ、手当が緩慢になり、そこに隙ができたように思った。いつもは、ほかの人たちが弱ってくればくるほど、彼はますます元気になった。だが、今の彼は、その精神的抵抗力が肉体の疲労に抵抗し得ない程度に達していた。ローザンヌへの出発以来、これで四日間というものの横になつていなかった。食事もとつていなかった。わずかにきょう、つとめて少しばかりの牛乳を飲んだにすぎなかった。要するに、冷し紅茶だけでもたせてきたのだ。彼はそれを、ときどきごくりと口に流しこんでいた。ますます深刻なものになつていく神経のいらだちは、彼にたいして何かしら精力的な見せかけをあたえていた。だが、それは見せかけだけにすぎなかった。事実としては、こうした事態が彼に求めているもの、すなわちこうした忍耐なり、期待なり、全体的な無力の気持によつて麻痺させられている見せかけだけの元気さなどは、むしろ根本的に彼の気質と相容れないものであり、彼にたいして、堪えられぬほどの努力を要求しているものだった。それでいながら、なんとしてでもがんばらなければならなかった。そして、絶えざるたたかいに力を尽さなければならなかった。なにしろ、たかいは間断なしにくり返されているのだから！

ちょうど十一時ごろ、一つの発作が終わろうとして、四人がともにうつ向きこみ、最後のけいれんを見まもつていたとき、アントワヌは、さっと身を起こしたかと思ふと、何やらいまいまいしそうな身ぶりをした。新しい、じめじめした汚点が、シーツの上にひろがっていた。腎臓が、またもやりっぱにそのはたらきをはじめたのだ。

ジャックは、腹だたしい身ぶりを禁じ得ないで父の腕を放した。こいつはあんまりひどすぎる。つまり、中毒の結果、臨終が近いと思えばこそ、こうして立つていられたのだ。ところがどうだ？ 何が何やらけんとうがつかない。この二日以来、まるで目の前で「死」がたんねんにわなを張つてでもいるようだった。そして、ぜんまいは、やつと巻かれはじめたと思うたびに、ばらりと留め金からはずれてしまう。そして、新規時直しというわけだった。

このとき以来、彼はもう落胆を隠そうとしなかった。

けいれんとけいれんとのあいだ、彼はぐったりして、気むずかしくなつて、手近な椅子の上に、へたへたと腰をおろしていた。そして、肘を膝につき、拳を目にあてがつたまま、三分ほどもとろした。そんなわけで、発作がおこるたびに、彼に呼びかけ、その肩をつつき、目をさまさせてやらなければならなかった。

夜半近くになるやいなや、病状はまったく危険状態を呈してきた。たたかいは、もうこれ以上不可能のように思われた。

きわめてはげしい三回にわたる発作が次から次へとおこつてまもなく、四回めの発作があらわれた。

それは、おそろしい様相をしめしていた。今まで見られたあらゆる現象の、そのはげしさを十倍にしたようなものだった。呼吸がとまった。顔は、充血した。目は、半分眼窩から飛び出していた。前腕は引きつれ、折れこんで、そのため手がかくれたようになっていた。そして、顎ひげのかげには、両の手首が折れ曲がり、まるで切株のように見えていた。四肢は、引きつれようとしてふるえていた。筋肉はこわばつて、こうした努力のため、今にもはりさけそうに見えていた。硬直の時期がこんなに長くつづいたことは初めてだった。刻一刻、時がたつた。だが、はげしさはなかなかおさまらなかった。だんだん、顔が黒ずんでいった。アントワーヌは、てっきり死がやってきたと考えた。

つづいて、唇のあいだからはあえぎがもれ、よだれがすこしあわをたてた。急に両腕がぐったりゆるんだ。今度身ぶりがはじまった。

それはやがて、ものすごいほどのはげしさを加えて、そうした狂乱をおさえるため、狂人服でも着せなければとさえ思わせた。兄弟二人は、年寄りの童貞さん、アドリエンヌの二人にも手伝ってもらつて、荒れ狂う病人の手足にしがみついた。ふりまわされ、引きずられて、みんなはよろけながら、まるでフットボールのスクラムさながら、たがいにぶつかりあつていった。まず第一に、アドリエンヌが、持っていた脚を放してしまった。すると、二度とそれがつかめなかった。年寄りの童貞さんは、ふりまわされてあわやひっくりかえりかけ、体の中心を失つてしまった。そのとたん、いっぽうの脚がするりと手の中から抜けた。両脚は、いま自由になり、ばたばた空にもがきはじめた。かかとはすりむけて、ベッドの木を血に染めていた。アントワーヌとジャックとは、息を切らし、汗みどろになりながら、この大きな肉体が、ときおりぐつと飛びあがり、夜具の外に投げ出されないよう、体をよせて固めていた。

こうした狂おしい興奮が消え、（それは、はじめのときとおなじく、とつぜんけろりとやんでしまうのだった）病人がふたたびベッドのまんなか寝かされたとき、アントワーヌはいく足かうしろへさがった。神経は緊張し、